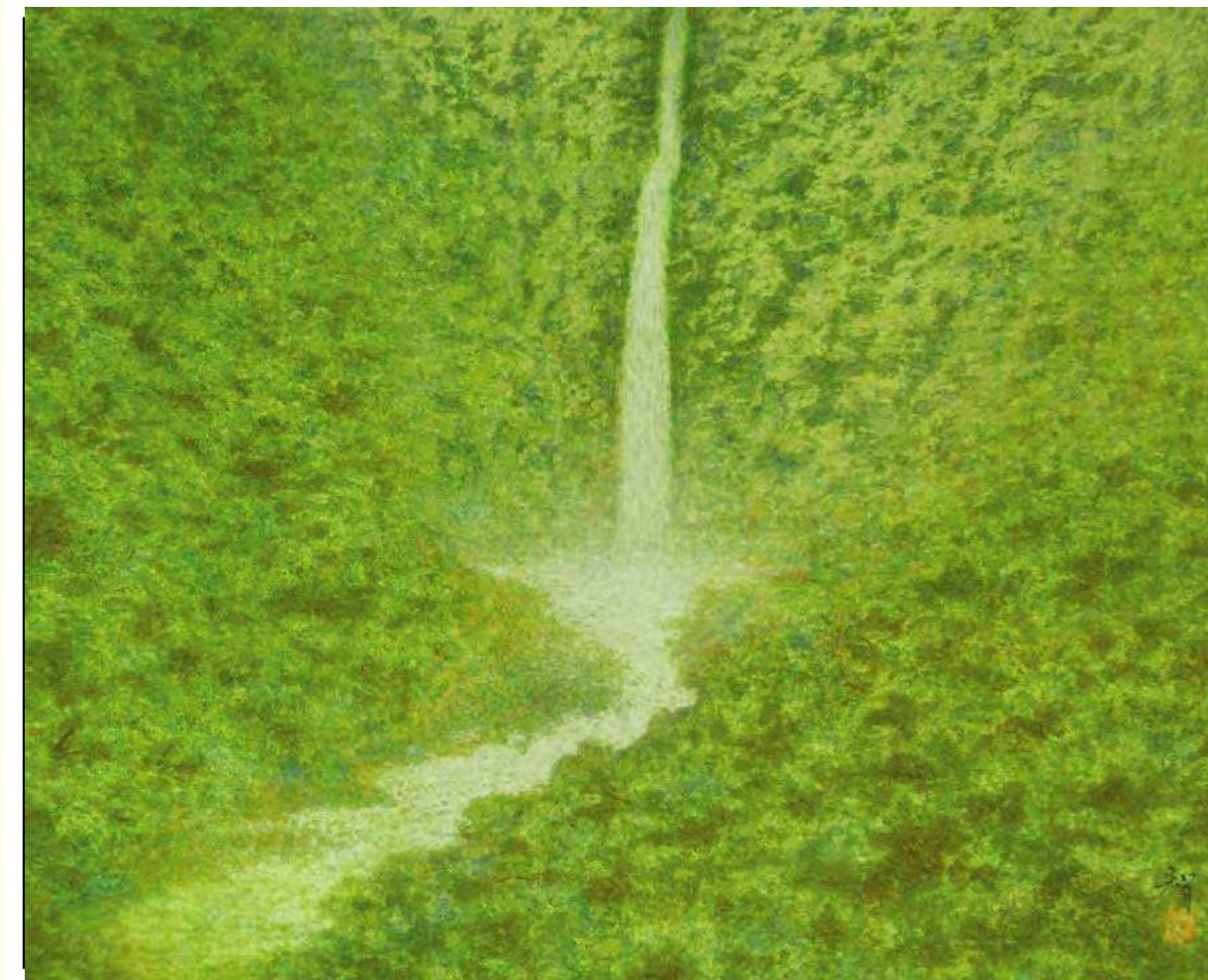


こころの旅路

加藤智



加藤 智 - こころの旅路 -

※禁無断転載 ※不許複製

加藤

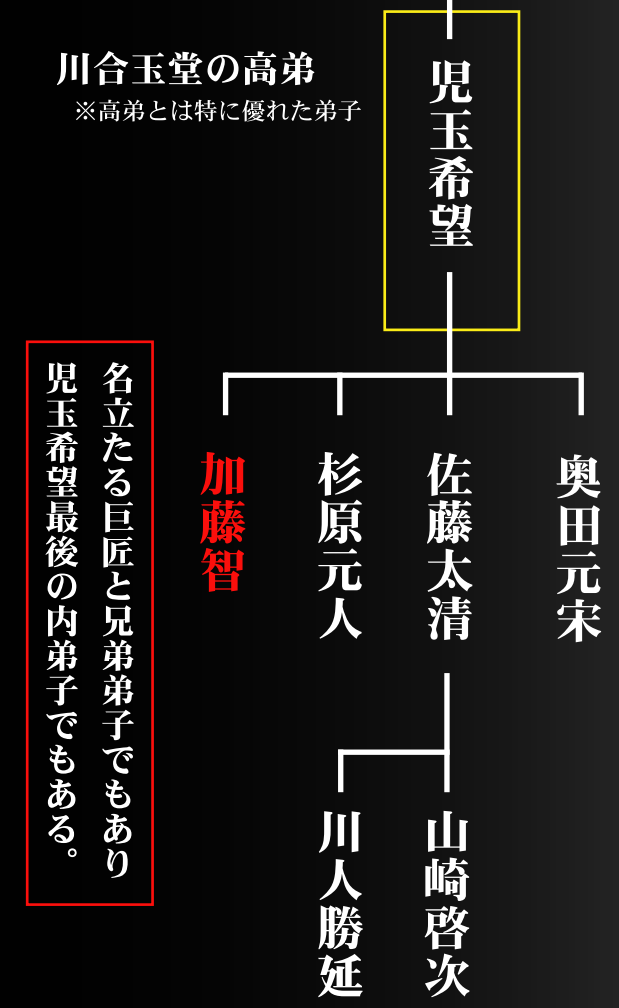
智 心象スケッチ



系譜で見る

日本画壇のサラブレッド

近代日本画壇の三大巨匠



名立たる巨匠と兄弟弟子でもあり
児玉希望最後の内弟子でもある。



プロフィール

- 1947年 東京に生まれる
- 1966年 杉原元人に師事
- 1968年 児玉希望に内弟子として入門
- 1971年 第3回日展に初入選、以降24回入選
- 1973年 奥田元宋に師事
- 1989年 第24回日春展にて日春賞受賞
- 1994年 第29回日春展にて日春賞受賞
- 1994年 第26回日展にて特選受賞
- 1995年 第29回文化庁現代美術選抜展出品
- 1996年 第31回日春展にて外務省買いあげ
- 2000年 第32回日展にて特選受賞
- 2001年 第35回文化庁現代美術選抜展出品
- 2002年 日展出品委嘱、会友
- 2009年 第41回日展審査員
- 2010年 日展会員
- 現在 千葉県習志野市在住

上質の時間

それは旅の感動を描いているとき



大源太山 — Daigentasan — 尺五



早春の信濃川 尺五
— SoshunnoShinanogawa —



白鳥飛来 — Hakuchohirai — 尺五



飛翔 — Hisho — 尺五



谷川惜春 — Tanigawasekishun — 尺五



尾瀬惜春 — Ozesekishun — 尺五



寒椿 — Kantsubaki — 尺五



白玉の滝 — Shiratamanotaki — 尺五



赤富士 — Akafuji — 尺五



春嶺 — Shunre — 尺五



錦秋奥入瀬 — KinshuOirase — 尺五



緑韻 — Ryokuin — 尺五



富嶽山水 — Fugakusansui — 尺五



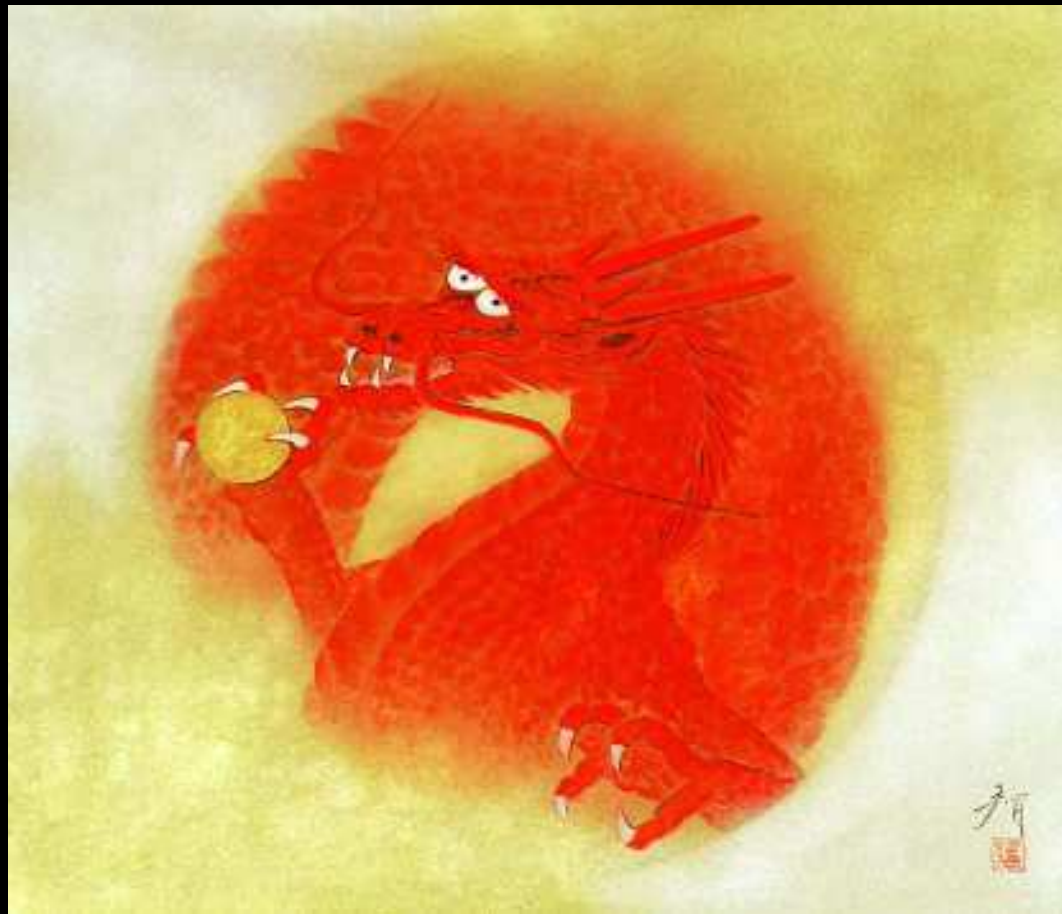
水墨山水 — Suibokusansui — 尺五



上高地 — Kamikochi — 尺八



仲秋 — Chushu — 尺五



赤龍 — Sekiryu —

尺八横



赤富士 — Akafuji —

尺八横



上高地 — Kamikochi —

尺八



上高地 — Kamikochi —

尺五



水温む瓢湖 - Mizunukumuhyoko - 尺八横



妙高 - Myoko - 尺八横



信濃川早春 - Shinanogawasoshun - 尺八横



涼風 - Ryofu - 尺八横



富士 - Fuji -

尺八横



初秋 - Shoshu -

尺五アンドン



富士 - Fuji -

尺八横



飛翔 - Hisho -

尺八横



尾瀬 - Oze -

尺八横



春嶺 - Shunre -

尺八横



上高地 - Kamikochi -

尺八横



富士翔鶴 - Fujishokaku -

尺八横



富貴花 — Fukibana —

尺八横



谷川早春 — Tanigawasoshun —

尺八横



仲秋 — Chushu —

尺八横



緑韻 — Ryokuin —

尺八横



富貴花 — Fukibana —

F10



山雲 — Sanun —

尺八横



赤富士 — Akafuji —

F10



煙雲 — Enun —

尺八横



木瓜 — Boke — F4



菖蒲 — Shobu — F4



カトレア — Katorea — F4



山茶花 — Sazanka — F4



鉄線 — Tessen — F4



水仙 — Suisen — F4



花桃 — Hanamomo — F4



胡蝶蘭 — Kochoran — F4

次世代の日本画

二〇〇六年九月―広島県三次市にある奥田元宋・小由女美術館でひとつの企画展が行われた。「受け継がれる画家の魂 川合玉堂・児玉希望・奥田元宋」である。近現代の画壇を牽引した日本画の巨匠・師弟三代である。三者三様の強い個性を持つ作品達は、今もなお多くの人を魅了してやまない。

私はこの巨匠三代の名前を聞くと必ず四代目としての可能性を感じる人物を思い出す。児玉希望最後の内弟子であり、その最期を看取った人物でもある加藤智である。私が加藤智の作品を初めて見て驚いたのは、その多様性にある。「絵はその作家自身を表す」と私は常々思っているのだが、まさに加藤智の歩んできた歴史が作品から伝わってくるようだった。

「山雲」は、児玉希望が最後に辿りつき、他の追随を許さなかったと言われる絹本水墨画を正統に受け継いだものである。

「春嶺」には、小難しい画論や理屈はなく、ただ美しい日本の自然風景が広がっているが、この平明平易な画境こそ川合玉堂から児玉希望に受け継がれた精神性である。

特色のある「赤」を初めとする色彩感覚は、児玉希望亡き後に弟子入りした兄弟子にあたる奥田元宋の影響であろう。

師の画風のみならず、額絵に多く見られる金箔の上に厚く岩絵具で描き上げる作風は、古典を丹念に研究し独自の作風にまで昇華させたものである。

四代目を感じさせるその実力は、日本画壇での評価も高まってきている。

二〇一〇年に日展の新人事が発表された。平山郁夫に代表されるように世代交代が叫ばれる現代の日本画壇において注目の人材である。その中で画壇の後押しを受け、加藤智が日展の新会員となった事は記憶に新しい。

受け継がれし画力と共に、飽くなき探究心と挑戦心を持つ加藤智が、次世代の日本画壇をリードしていくのもそれほど遠くないだろう……

(文・ゆういち)



秋溪 — Shuke — F3



曙富士 — AkebonoFuji — F3

旅路

思えば私は非常に数多くの偉大なる先人達に導かれて今日ここにいるように思います。

画業を志し、18歳の時に出会った杉原元人先生。杉原先生は洋画を勉強していた私に日本画を薦めて下さり、日本画壇の巨匠・児玉希望先生に私をご紹介してくださいました。

私は児玉先生の製作を一番傍でお世話させていただく内弟子になる事が許され、本格的に日本画の手ほどきを受けることになりました。この濃密な三年間が今の自分の画力の礎になっていると思います。

児玉先生が亡くなられた後、私の面倒を一番長く見てくださった奥田元宋先生にも大変感謝しております。

世代交代が叫ばれる今の日本画壇において、多くの先人達が自分に残してくれたものを大切にし、そしてあらたなる挑戦の中で自分の画境を切り開いていく事が私の役割だと思っています。

また、先の震災で被災されました方々に心よりお見舞い申し上げますと共に、復興の為に一人の芸術家として何が出来るかを模索し続けていこうと思います。まだまだ道半ばの画業ですが、私の事を応援してくださいる皆様に感謝の意を込めて、これからも精一杯の力を込めて絵に取り組んでいきたいと思っております。

平成二十三年

希